

研究

用米城について

一踏査・実測による考察一

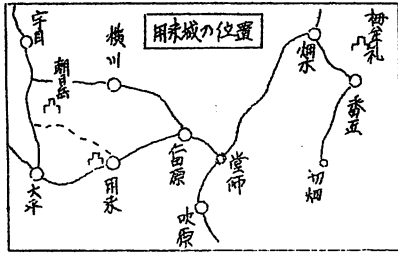
日本城郭研究会委員 小野 英治

用米城は、直川村大字仁田原の、用米部落の背後にある小高い丘であるが、この城は、榊牟礼城の支城（山城）であるとして、地元で伝承されてはいるが、築城年代、戦史等全く不明で、城に関する文献も全くないという。

しかし、その位置するとすれば、宇目郷より榊牟礼城に至る仁田原谷の久留河川と、用米城のある丘と峯つづきの山（海拔三百五十九米）にはさまれた道路路上にあつて、榊牟礼城へ向かう敵を防ぐには、絶好の地である。さて、この城に物語りのないのは、どういふ理由によるものであろうか。赤生所にも大字江長に、竹田城と称する城址があるが、やはり全く物語り、記録の類がない。

筆者は、築城年代、廢城年代、戦史不明な城が、果下に意外と多いのに驚かしてはいるが、これらの城は実際に戦いと経験しなかつたから、このような、忘れられた城址となつてしまつたのではないかと考へてゐる。

天正十四年一十五年の豊薩戦において、防戦した城は多いが、それら

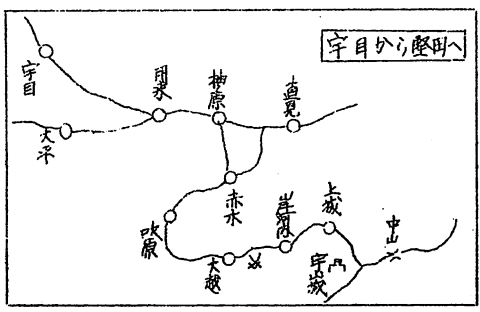


はいずれも小さな砦の類、薩藩の陣城のようなものまで戦史に残っているのである。それが、この頃の城と思われる。そして当然一戦交えねばならぬ地に位置している城が、全く戦史に出ないというのは、どうしたことであるか。私はその理由として、次のように考へられるのではないかと考へる。

天正十四年（一五六六）、堅田で島津軍と戦い、これを降した佐伯惟定は、当然再度の島津軍の来襲を考へたであらう。そしてこれに備へ、堅田に至るまでこれを迎え討つ城砦が必要となり、そこで築かれたのがこの用米城ではなかつたか。しかし、再びこのコースを薩軍は来襲して来なかつた。それがいつしか忘れられた城と化してしまつたものと臆測している。

今から考へると、島津軍は用米城下を通らず、はるか手前の杭の内身たりから、黒沢經由で堅田に出る道が直線的で、距離にして北近いかと思われるが、当時この道はまだ開かれていなかつたか、あるいは利用度の低い間道であり、薩軍の知るところでなかつたようである。

堅田段入の薩軍のコースは、宇目郷より用米城下を通り、柚の原から堂師坂を越して、赤水谷との戻り、吹原峠から大越の巽を經て堅田に至つたと見てよいようである。それは、当時このコースが幹線であつたやうで、参謀本部編の「日本戦史附図（明治四十四年刊）」、「徳富猪一郎著の「近世日本国民史・豊臣時代乙篇（大正七年刊）」、さら



用米城址実測図

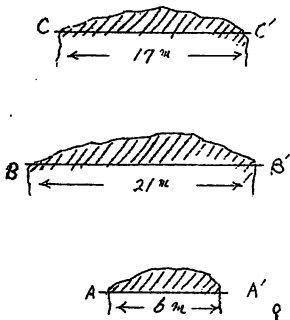
(伝梅竿礼支城)

所在地 大分県南海部郡直川村
大字仁田原字用米

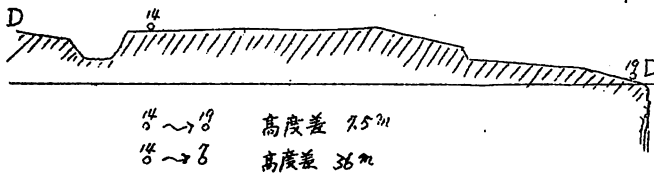
神社
神社境内



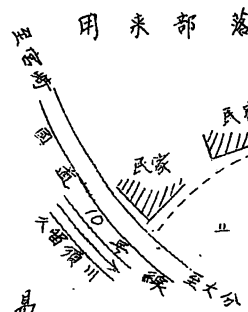
(横断面図)



(縦断面図)



14 ~ 10 高度差 25m
14 ~ 8 高度差 36m



に「大分縣隊又管内に於ける郷土
歴史の研究(昭和四年刊)」等、
すべてこのコースをとっている。
さて以上用米城の位置するとこ
ろを記したのであるが、城そのも
の以上掲の図の如く、さして大き
な規模のものではない。しかし周
圍は急峻な断崖で囲まれ、南
西の峯続きの最も弱点と思わ
れる所は、図にみるように、
三、八米という大きな堀切を設
けているのが注目される。当
時はこの堀切も深く、両側も
急斜面であつたろうことは、容
易に理解されることである。

東北方に位置し、かつては石門が見られたとい
う大手門のおとも、現在では全くその址をとどめて
いないが、往時はこのあたりには城番の屋形が設けら
れていたものとも推測される。
用米城については、直川村史談会の梅井幸氏の「
用米城由来記」がある。

(この項終り)

堂 節 坂 櫻 井 幸

登堂節坂望龍峯
往時藩候亦越此
於流坂
先哲詩篇正絶唱
石佛黙之秋草中

文化夜半於流坂
七村農民集結地
炬火焦野鐘鼓音
羨拳踏死詠窮艱